

居住および食事形態が家族の主観的健康度に与える影響 — 母娘の調査より —
東京大医 ○岡島史佳、荒記俊一、村田勝敬
LCCストレス医研 内田栄一

【目的】 家族構成員の健康は相互に影響することが考えられる。本研究では、家族構成員のうち母と娘の自覚的健康度の関連を調査した。また、自覚的健康度が居住・食事形態の相違により影響を受けるかどうか検討した。

【対象と方法】 東京都内の保育専門学校1年生(娘、18~20, 平均19歳)とその母親(40~65、平均46歳)を対象とした。生徒は自宅生が90%であり、自宅外(寮)生が10%であった。1991年9月に生徒113名とその母親に自記式健康調査票(THI)を配布し、89組から回答を得た(回収率79%)。THIは心身の主観的健康状態を表わす130の質問項目からなり(青木ら、1974)、12尺度の得点が算出される。母娘間の平均値および相関係数を各尺度毎に算出しt検定を行なった。さらに、娘の居住形態(自宅および自宅外)およびいっしょに夕食をとるか否かで各々2群に分けて、母娘間の相関を検討した。

【結果】 ①12尺度のうち情緒不安定性、抑うつ性、生活不規則性では娘の得点が有意に高かった。一方、自分を良く見せたい傾向を示す虚構性では母の得点が有意に高かった。また、消化器、直情径行性、虚構性、情緒不安定性、抑うつ性および生活不規則性の尺度で母娘間に有意な正の相関があった。②自宅生の母娘間では有意な相関が6尺度(目・皮膚、消化器、虚構性、情緒不安定性、抑うつ性、生活不規則性)で認められたが、自宅外生では2尺度(抑うつ性、情緒不安定性)しか有意な相関がなかった。また、一緒に夕食をとる群の母娘間で有意に関連のあった項目は、直情径行性、虚構性、情緒不安定性、抑うつ性、攻撃性の尺度であったが、一緒に夕食をとらない群では直情径行性の1尺度のみであった。